伊豆の長八生誕200年祭によせて

入江長八

文化12(1815)年、長八が生まれてから、今年が200年めにあたります。この年を記念として、改めて私たち町民みんなで入江長八のこと、彼の残した作品を顕彰してみませんか。長八作品の中で代表作とされるものをいくつか紹介いたします。
『伊豆の長八美術館』・『長八記念館(浄感寺)』は、町内在住者は無料で入場できます。

長八は、松崎村明地(みょうち)で生誕。13歳の頃、左官業関仁助の弟子になります。天保3年(長八17歳)江戸へ出てしまいます。その時は天保大飢饉で米価は暴騰し、江戸でも餓死者も出て、幕府は『人返し令』を出して江戸の人口を減らそうとしていました。その時長八が江戸へ出奔した理由はわかりません。川越(埼玉県)で、左官や絵の修業をしていたこともあります。天保13年、江戸深川に定住します。隅田川にかかる新大橋のたもとで、かつては松尾芭蕉、日本画家の伊東深水も住んでいました。関東大震災、東京大空襲で被災した新しい住宅街です。

弘化2(1845)年、郷里松崎の浄感寺の改築に参加。寺内の天井に『雲龍』、欄間に『飛天』を制作。これが長八の出世作といえます。

雲龍
弘化3年(32歳)

本堂は僧や大衆に教義を伝えるお堂。龍は、この本堂を火災から護るため、水をつかさどり『法の雨(仏教の教え)』を天井から降らせる役目。

臼に鶏
60.0㎝×127.0㎝
年代不明

神農像
33.0㎝×21.5㎝
明治8年(61歳)

中国の伝説の帝王で
草をかんで薬をつくる

長八は江戸へ住んでからも、時々松崎へ帰省しています。父親が死んだ時、母親が死んだ時も松崎にいました。故郷の人達とも懇意にして、寺院・学校・商家などの新築、改築にも参加し、鏝絵師の腕をふるっています。また、この地の住人も長八の作品を希求し、大切に保存していました。長八の心は、ここ松崎にあったのかも知れません。

江戸末期から明治期には、松崎の港から木炭、薪などの産物の移出がさかんで、多数の貨物船が往き来していました。明治中期、依田善吾と近藤平八郎は、東京～松崎の汽船を就航させています。(汽船が座礁して事業は挫折)。松崎は交通の便のよい、東京にも近い所だったようです。

弁財天 124.6㎝×67.8㎝

明治13年(66歳)

毘沙門天 102.5㎝×43.0㎝

安政3(1856)年、長八41歳。東京目黒祐天寺の修繕に参加し、そこの不動尊を修理します。その際『天祐』の号を授かります。その直後制作した成田山新勝寺の『臼に鶏』に『天祐』の落款が見られます。印章には『天祐』『圬者(鏝を使う人の意』の字が彫られています。

長八の作品が多くの人に認められ、高い評価が得られるようになってきました。この頃から長八の作品が多く生まれていきます。

明治9年(62歳)23.6㎝×31.0㎝

応神天皇(おうじんてんのう)(抱かれている赤子)
古事記、日本書紀に登場する天皇
胎中天皇(生まれてこなかった)
ともいわれる。

武内宿祢(たけうちのすくね)
大和政権期に活躍した伝承上の人物
応神天皇にも仕え、偉功があったという。

神功皇后(じんぐうこうごう)
応神天皇の母とされる
明治9年(62歳) 37.0㎝×26.0㎝

入江長八のふだんのくらしを、当時松崎から長八宅で修業をしていた山本三右衛門が語っています。師匠の家は深川の八名川町で大橋を渡って行って、安宅の近所にありました。(略)仕事場は、小屋がけのような穢い所で、入口には注連縄を張って『無用の者入るべからず』と書いてありました。家には、龍沢寺から貰った袈裟と衣が置いてあって、それを着て朝晩お経をあげていました。身長は5尺4寸もあったでしょうか、普通より高い方で、やせ方で中肉の人でした。始終ニコニコしていて、弟子達にも冗談を言う。食事も麦の挽割と米と半々にしたものを食べていて、『お前達が、米のご飯を食べてはもったいない』。『食べます』というと、『それは俺の食べ物だ、食べてはいかぬ』。ハハハと笑う。笑うと靨が出てニコニコした顔になる。決して奢ったものを食べない。非常に質素でした。神仏を念じて、贅沢せず、なりもよいなりをせず、人に頼まれて塗っても、礼のことは決して言わぬ。そういう風の人でした。』(『伊豆長八』結城素明著より引用)

達磨大師
年代不明 21.0㎝×17.0㎝

近江のお兼
鎌倉時代、近江国海津にいたという
大力無双の遊女の名が『お兼』

明治3年(56歳) 45.7㎝×63.7㎝

二十四孝
中国で古今の孝子24人が選定されている
絵との関わりは不明

40.4㎝×63.3㎝
年代不明

長八の使用した絵の具（専門家の分析結果）
白ー鉛白（鉛を酢で蒸して作る）
　胡粉は使われていない。
赤ー朱銀（水銀を硫黄で熱する）
青ー人工群青・ウルトラマリン
　（炭酸ナトリウム・木炭・石灰・硫黄を
　加熱する）

明治期になると、長八の作品に変化がおきます。今までは漆喰の立像や漆喰壁への浮彫り（レリーフ）が多かったのですが、額装した鏝絵が増えます。ヨーロッパから輸入された油絵の影響と思われます。

長八は、明治10年第1回内国勧業博覧会に出品し、受賞します。その賞状に『浮起ノ法欧州ニ仿フ有ラバ更ニ佳妙ニ至ルヘシ』と書かれています。ヨーロッパの油絵のように明暗をつけて、立体感を出せば良くなるというのでしょうが、日本画を学んだ長八にはつらい注文だったに違いありません。出品した作品は、人物画でしたが現存していません。

静御前
源義経の愛妾
髪型からすると
時代検証が不可能

径32.4㎝
明治13年（66歳）

家内安全・商売繁盛
を祈願して、需要もあり
多く作られた

恵比寿 18.8㎝×11.5㎝　**大黒天** 18.2㎝×12.8㎝
明治20年（73歳）

飛天
弘化3年（32歳）

空中を飛行する天女　浄感寺欄間

不動明王
明治11年（64歳）

明治11年、長八64歳の時、三島龍沢寺で百日参篭をします。以前から仏教に帰衣していた長八は修業しながら、大作の不動尊像を制作します。総高1.8m、その脇に1.2m高の矜迦羅童子と1mもの半迦の制多迦童子蔵が並びます。長八の心意気を見せた作品と言えましょう。長八は龍沢寺で星定老師から『居士』号を授けられたという説もあります。『居士』とは高徳な人を表わす称号で、名実ともに『名人』として認められたのだと思います。以後、長八の作品に『天祐居士』の落款が見られます。

『伊那下』額
86.8㎝×244.0㎝
年代不明

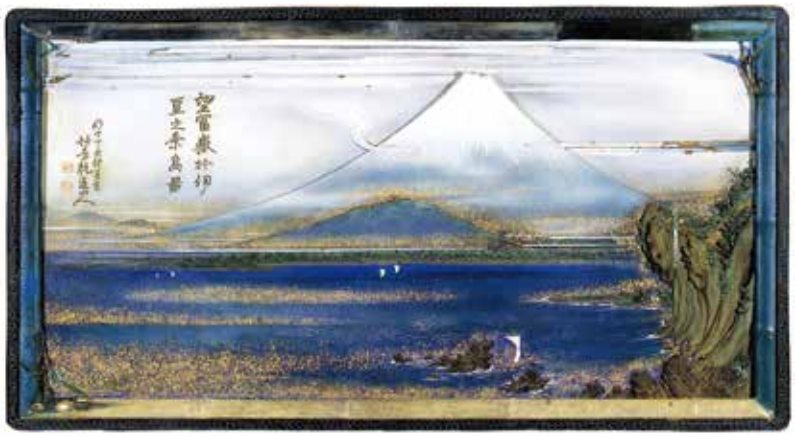
山岡鉄舟が揮毫し、長八が漆喰仕上げをした作品。長八はイタリアの大理石を模倣し、彩色してツヤを出している。

長八と山岡鉄舟

長八が三島龍沢寺に参禅滞在している際に、山岡鉄舟に出会い互いに意気投合し共に研鑽を高めたとされています。山岡鉄舟といえば幕末から明治へかけて活躍した歴史上の人物です。特に、反幕府軍が江戸城攻撃の際、西郷隆盛と勝海舟の間に入って、無血クーデターで江戸城を開城させた立役者です。その山岡鉄舟の書がこの地区に残っているのです。伊那下神社に『伊那下』と書かれた大きな偏額（長八が漆喰で仕上げてある）、春城院本堂正面に『龍華山』（春城院の山号）、責善社に『江南黌』（明治17年江奈村が建てた小学校名）の偏額、それに岩科八区所蔵の掛軸等。それらは鉄舟がこの地に滞在して書かれたものだろうと思われるのです。岩科小学校（現重文岩科学校）建築の際、長八と共に山岡鉄舟もこの地に滞在していたのでは？そんなふうに思えるのですが。

赤色の牡丹の鏝絵と
一対の作品だったといわれる

寒牡丹
92.0㎝×70.7㎝
明治20年(73歳)



富嶽
74.5㎝×137.0㎝
明治10年(63歳)

この絵の額は竹製(漆喰仕立)と見間違って、
防虫剤としてペンキを塗ってしまったとのこと。

数多くの鏝絵作品を生んだ入江長八は、明治22年に亡くなります。75歳でした。この年『大日本帝国憲法』が発布されました。町村制が実施され、この地域では21村あったのが松崎村・中ノ郷村・岩科村になりました。　　長八の辞世:『我秋や月一と夜も見のこさす』

千羽鶴
明治13年(66歳)

冴える長八の技

入江長八

長八の作品は、江戸・明治・大正・昭和・平成と時を経ても多くの人びとに高い評価を受けています。漆喰鏝絵は全国に多くありますが、それが芸術作品として認められるものは、数少ないのではないでしょうか。建物の壁の装飾を超えて、一つの独立した作品として存在するには、見る人をうならせるだけの技術と感性を表現したものでなければなりません。長八の作品のいくつかを紹介します。これらの作品はいずれも「伊豆の長八美術館」に展示してあるものです。改めて、美術館を訪れて、作品を鑑賞してください。長八作品が自分の身近なものになると思います。

関仁助像

19.8×15.8cm　明治９年（長八６２歳）

この作品は、「関仁助像」です。長八は若くして左官になるべく親方のところに弟子入りします。その親方が関仁助です。ところが長八は１９歳の時、親方のところをとび出して江戸へ出ます。当時、職人の間では厳しい掟の徒弟関係があり、許される行動ではなかったと思います。長八は、自身62歳、親方が死んで３５年もたってこの像を作ります。その際の長八の心境が、この像の表情にあるのではないでしょうか。何か不安そうで寂しげで、何を話そうとしているのでしょう。鏝をふるった長八の心境が偲ばれます。（作品は鼻が欠損し、多分神棚などに安置されていたのでしょう。油煙で元の色が不明です。）

二見浦
46.1×64.9cm　明治7年（長八60歳）

この作品は、二見浦の日の出の風景だと言えばそこまでですが、丁寧に見るといろんな事が描かれています。長八作品の特徴の一つは、鏝で微妙なところまで表現できていることです。この作品には１９人の人物が登場しています。（１７人だろうと言う人が多いと思いますが）。その人物についての細かいところまで鏝が使われています。写真を見てください。主人らしき人が紋つきの羽織を着ています。その奥方でしょうか上帯（うわおび）を締めています。そばに弓張提灯があります。まだ暗いうちから、初日の出を拝みにきたことがわかります。登場人物の中には日の出に向って柏手（かしわで）を打っていると見られるのもあります。作品を鑑賞する人々にも、長八は無言で語りかけていたのではないでしょうか。

静御前
径32.4cm　明治13年（長八66歳）

長八は、狩野派の絵を学んだとされていますが、その実力を発揮して美人画に仕上げています。浮世絵の影響を受けているのでしょう面長で目尻の切れた美人の典型で、眼は玉眼（ぎょくがん）です。漆喰という素材を研いだ鏝で何十回と擦ることで、石膏やＦＲＰ（強化プラスチック）とは違った皮膚の質感が出ていると思われます。漆喰は古くなると微妙に色が変わります。淡いピンク色が着きます。この作品は１２５年という年月を経て、より豊かな表情に変わっていくのでしょうか。漆喰という素材はこれから百年後も存在できると思われますか。

二十四孝
40.4×63.3cm　（年代不明）

激しく降る雨の中に、笠を被り、蓑を着て杖をもった男が一人立っています。長い髭をたくわえていますので、身分の高い人だと思われます。雨を強い直線で表わして、三人の人物の緊張感が伝わってくるようです。

カメラを作品の左に寄せると、中央の男の表情が写真のように変わります。男の右側の頬まで漆喰が盛り上げられています。相当立体的に作られています。杖を握っている手の甲まで描き上げています。こうした技術や感性が、「天祐居士」にふさわしいといえます。

あまのうずめのみこと
天鈿女命
29.2×40.9cm　（年代不明）

「光る玉眼（ぎょくがん）」

眼にガラスか水晶をはめ込み、当る光線のぐあいによって眼を生き生きと見せます。長八の作品のいくつかはこの技法が使われています。これも長八の技だったに違いありません。眼球にハイライトが見えると、顔全体に動きがでます。長八も作品を鑑賞してくれる人びとにも気づいてほしかっただろう、そんな風に思います。

日本では民間のガラス工場ができたのは明治１９年ですので、この作品はガラスか水晶かは不明です。いずれにしても眼球に磨くのですから、難しい技術だと思います。

富　嶽

74.5×137.0cm　明治10年（長八63歳）

長八の作品には、富士山を主題にしたものがいくつかあります。遠くにある富士を絵の中にそのまま取り込んで、それで富士の壮大さを見せるにはどうするか、現代の芸術家のテーマでもあります。長八は富士山の稜線を際立たせることに腐心したのだと思われます。富士を浮き彫り（レリーフ）にし、稜線を断ち切りにして陰を濃く表現します。写真右下は富士の稜線の上にかかる雲です。陰が濃く表われるように工夫されています。鏝絵の技術が遺憾なく発揮できたのだと思います。

春暁の図

173.0×76.0cm
明治8年
（長八61歳）

「香炉峰（こうろほう）の雪は簾（すだれ）をかかげてみる」という白居易（はくきょい）（唐の詩人）の詩歌を元にした絵ですが（この絵は長八のオリジナルではありません）ここでも、光と陰を意識して鏝をふるっています。胸元と顎と口に咥えた袖を、見事に浮き彫りさせています。

長八の作品をていねいに鑑賞しますと、いろいろ気づかされることがあります。長八が精進して身につけた技、それを後世の私たちに気づいてくれと言っているようです。

是非、長八美術館にも足をお運びください。これらの作品がまた次の世代の人にも大切にされるよう私たちが伝えていかなければならないのですから…。

発行：伊豆長八作品保存会 Tel.42-0745（松崎町観光協会内）　印刷：㈲山本印刷